

子どもの居場所を編み直す
葛飾区東四つ木を対象とした地域インフラとして根付く学童保育施設

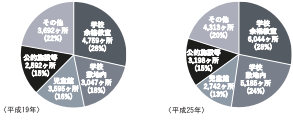
今日、首都圏において待機児童問題と並び、「小学生の放課後問題」が深刻化している。共働き家庭は、学童保育施設(以下、学童保育とする)に子どもを預けることが多いが、希望者増により学童保育に選べない「待機学童」が増加している。そのため、都心部では学童保育を増設し、待機学童を減らす取り組みが行われているが、政策や整備の遅れにより現状では必ずしも行き届いていない。また、建物の量的な拡充を急ぐあまり、空間的質的な充実に欠ける学童保育も少なくない。こうした状況を踏まえ、本計画では、空間的な量かさを備えつつ子どもの日常的な居場所となる、地域のインフラとして機能する学童保育施設を提案する。



学童保育施設の需要と今後の利活用のあり方



学童保育施設とは
学童保育は、高度経済成長期より、共働き家庭の増加や核家族化の進行でカボッ子が増加したことから施設の需要が急激に高まった。主に日中、保護者が家庭にいない小学校低学年に対して、放課後に適切な遊びや生活の提供をする場である。

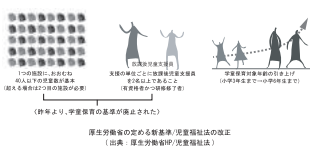
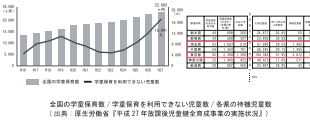


地域から選べる学童保育
今日、小学校の余剰教室を学童として転用するケースが年々増えている。余剰教室以外の学童施設には、児童館併設、学校敷地内外の専用施設、幼稚園・保育所併設、民営利用・民営利用の多様な運営形態がある。その中でも余剰教室はコスト・延滞期間の改修で整備可能である。また、都市部・郊外共に、プレファブのような一定の質しか満たさない空間が広がり、校内や校外に用いた空間が保育の質を上げている可能性がある。

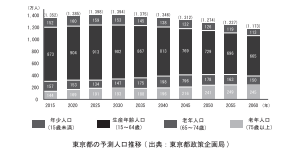


小学校の余剰教室の転用 余剰教室 → 放課後児童クラブ(出典:文部科学省HP)

学童保育施設の現状
全国的に学童保育を受けられない児童数が増加する中、主に東京や埼玉などの都心部で待機学童数が急激に増加している。しかし、待機児童の数を把握していない自治体もあり、全国学童保育連絡協議会は、2025年までに計約30万人分の受け皿を確保する方針を示している。



不安定な学童保育制度
現在、2015年度に厚生労働省の定める新基準を制定し、児童福祉法の改正による学童保育対象年齢の引き上げ(小学3年生から小学5年生まで拡大)が行われた。しかし、学童保育の基準単位の決定により、保護者らの団体からは「保育の質の低下につながる」となど不満の声が上がっている。



予備人口推移からみる今後のあり方
東京都の予備人口推移は、2025年にかけて全人口の増加が見られる。しかし、少子高齢化の影響により、若年人口(15歳以下)は増加し、年少人口(15歳未満)は減少していくと予測されている(一時的に子どもの割合が高くなる区もある)。これまで需要があった建物を利用する人が減少する中、長期的な利活用の方法を考える必要がある。

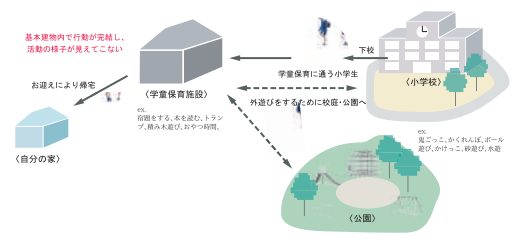


提案 --- 地域密着型学童保育施設を用いた地域デザインの可能性

これまでの考察を踏まえ、本計画では、地域に根差す既存環境を活かした用途を複合し、子どもの居場所を中心とした地域密着型学童保育施設を用いて地域デザインを行っていく。

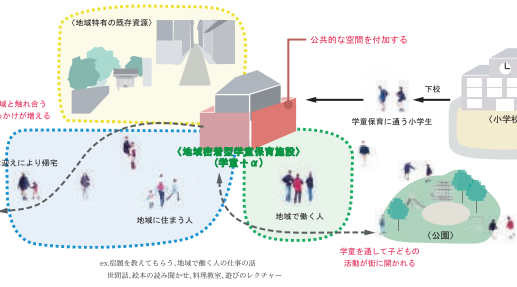
一般的な学童保育施設 (公立学童保育)

公立学童保育施設は、放課後の時間を安全に過ごす場所の確保にはじまり、勉強・遊び・集団行動などの(生活する場)としての基本内容が設けられている。学童保育での生活は子どもたちが中心であり、時間ごとにすべきことが順番に決まっているわけではなく、宿題をする、ボール遊びをするなど、子どもたちが自分の意思で決めていることが多い。指導員の先生は、その間にトラブルや事故がないように見守り続けている。



地域インフラとしての“地域密着型学童保育施設”

学童保育施設における地域交流の活性化や、社会的ストックとしての持続可能性を踏まえ、地域インフラとして根付く学童保育施設を提案する。学童保育施設の一部に余剰を設け、その余剰に公共的な空間を付加し再構成することで、使い方に汎用性をもたせ、学童保育に空間子どもたちと地域住民が日常的に交流できる居場所とすることを試みる。子どもたちの居場所を中心とした地域社会の共通財産となるように、世代を超えて使い続けられる建築としての質的な充実に努めつつ計画する。塾や習いごと教室のような経済活動の一端としてではなく、地域に住む人や地域で働く人との交流を通して学びの場となるように計画する。



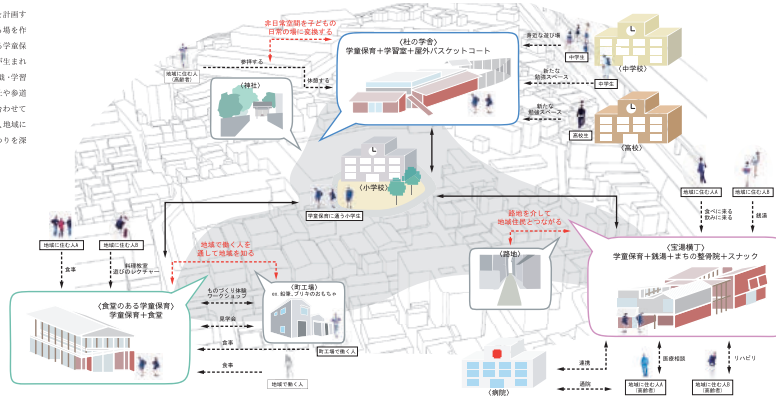
計画地 --- 機械音が響き渡るまち 葛飾区東四つ木

設計対象地として、待機学童が多く存在する東京都葛飾区東四つ木地域を想定する。東四つ木は葛飾区西部に位置し、商業施設や観光地といった大きな特色はないものの、住宅地の中に数食工場などの中小工場が点在する住居地域である。また、未造成地域に指定され、多くの人が工場と隣り合っている。機械音が街中に響き渡り、地域に住む人にとっての日常となっている。

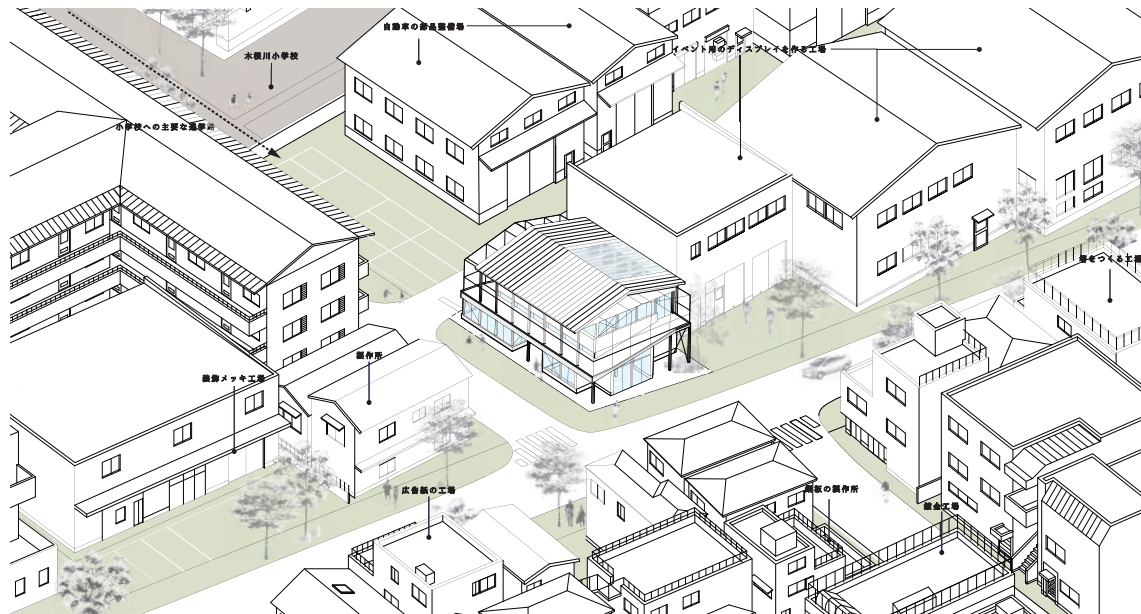


全体計画 --- “東四つ木らしさ”に満ちた、地域インフラとして根付く学童保育

東四つ木にある1学区を対象とし、小学校周辺に3つの地域密着型学童保育施設を計画する。地域に根付いた活動や人々の関係を学童保育に取り込むことで、住民と関わる場を作り出す。例えば、街工場で働く人や地域住民が気軽に訪れることのできる、食卓のある学童保育を計画する。このことにより、地域で働く人や住民と子どもとの交流のきっかけが生まれる。また、小学校と神社の参道に隣接する既存の学童保育に、中学生が利用できる遊具・学習スペースを増設する。参道子どもたちのための施設へのアプローチとすることで、神社や参道が日常生活に根差した身近な存在となる。さらに、今は無き公園を学童保育と組み合わせで新築として再生する。ここに、お茶を飲む、本を読む、図書館が利用できる空間を併設し、地域に住む多世代の居場所とする。地域資源と学童保育を関係付け、住民と日々の生活の関わりを深めることで、“東四つ木らしさ”に満ちた、地域に根付いた場所となる。



町工場で働く人や地域住民が気軽に訪れることのできる、食堂のある学童保育を計画する。1階に学童保育と食堂を配置する。1階から2階へと緩やかに連続する遊びの回廊は、子どもたちの新たな遊び場となる。こうした構成により、地域で働く人や住民と子どもとの交流のきっかけが食堂や遊び場を通して生まれる。食堂が子どもの放課後の居場所となることで、子どもの活動が街に表れやすくなり、様々な立場や世代の人々による風景が生まれる。



〈東四つ木〉特有の地域資源

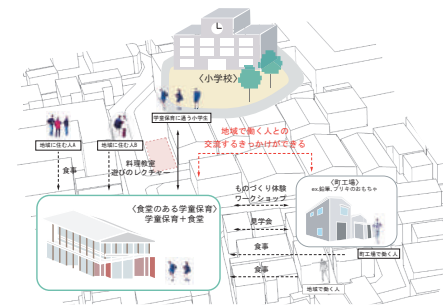


切妻屋根の町工場・・・計画地の前を通る「コミュニティ通り」と呼ばれる場所には中小工場と板の木が多く立ち並んでいる。春の季節になれば桜通りとしてまちを彩ってくれる。



木鏡川小学校の通学路・・・計画地より数十メートル先にある小学校。放課後になると、通学路は子どもたちで賑わいを放つ。

食堂のある学童保育 - 地域と関わる仕組み



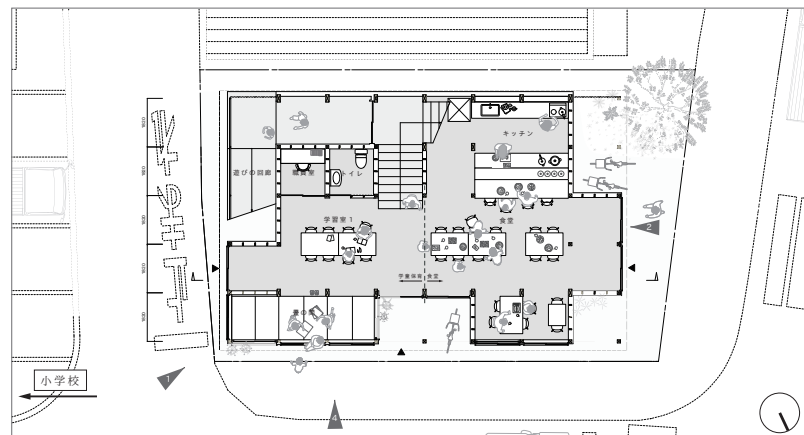
1. 小学生の帰宅路から見ると

切妻屋根の町工場が多く建ち並ぶ通りに対して、街に溶け込むような家型の建物とした。外側に面した立面には半臂で組み上げた屋根を増設し、街並みに存在するトタンやポリカーボネートのテクスチャを呼応するように計画する。

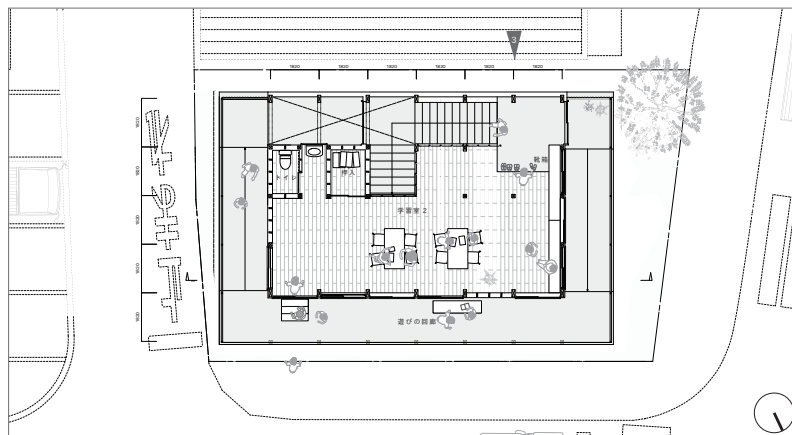


2. 1階食堂、学童保育・学習室

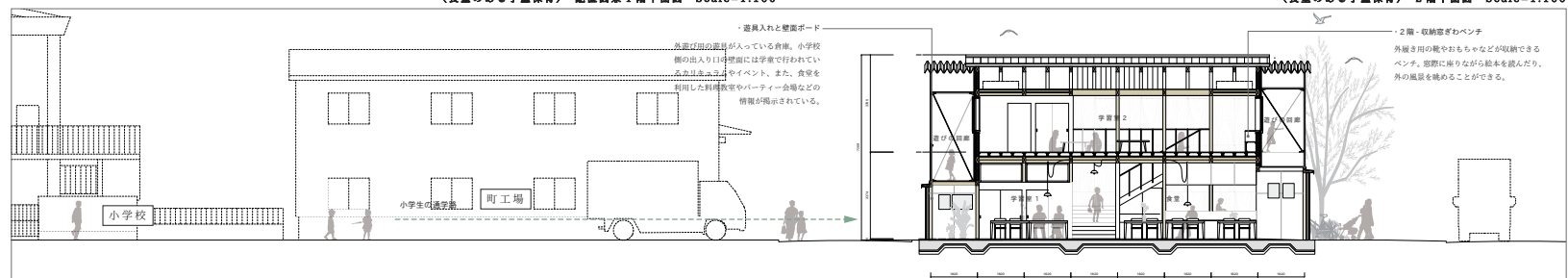
階段によって学童保育と食堂を緩やかに分断した空間を作り出している（手前：食堂、奥：学童保育）。食堂を介して子どもたちの活動が地域に関わり、住民や働く人々と交流するきっかけを生み出す。



〈食堂のある学童保育〉 配置図兼 1 階平面図 Scale=1:100



〈食堂のある学童保育〉 2 階平面図 Scale=1:100



〈食堂のある学童保育〉 断面図 Scale=1:100



3. 2階学童保育・学習室

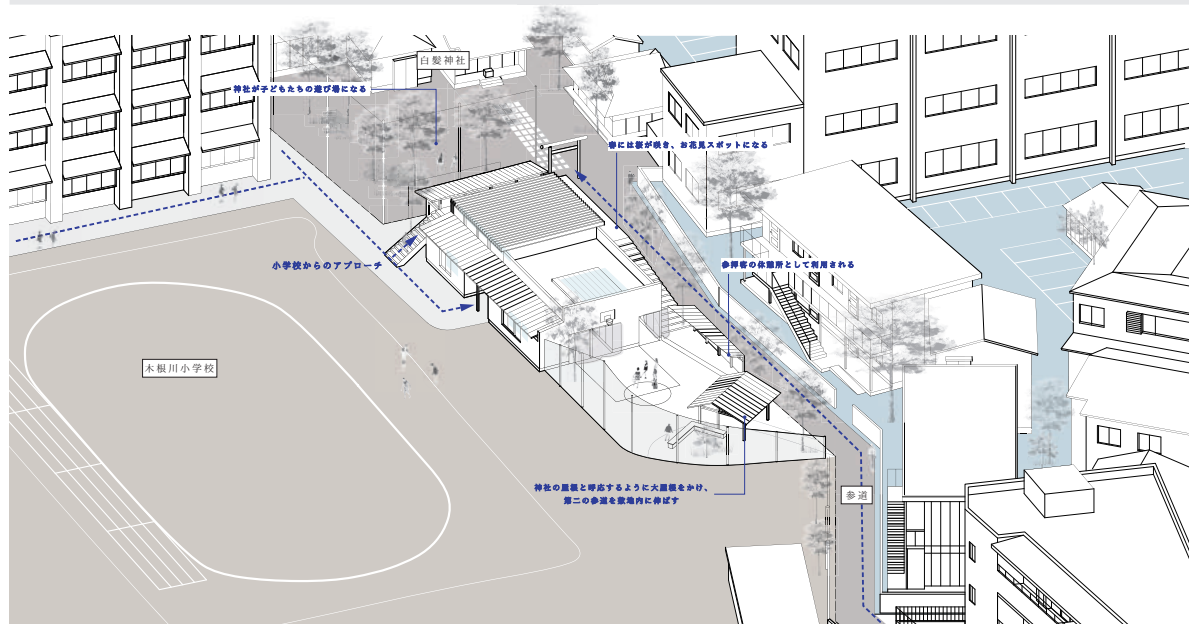
門型フレームと登り梁の木造架構によって、大きな気候を持つおらかな空間を作り出している。屋根の一部分を半透明のポリカーボネート板板とすることで学習室全体を明るく照らしてくれる。



4. 高平立面から建物を見る

敷地境界に面した上下階の空間は、食事をする人、走り回る子ども、勉強する子どもなど、内側で起る活動を外側に開くハブとして機能する。食を介して地域住民との直接的な関わり合いや、子どもの遊びを通してまちの気候になるような新たな居場所を作り出す。

小学校と神社の参道に隣接する既存の学童保育をリノベーションする。地域住民が深く関われるように、境界にあるコンクリート塼を撤去し、学童保育施設と参道の一部を再構成する。開放的な学童保育空間に加え、気軽にバスケットボールができる簡易バスケットコート、中高生のための勉強スペースを増設する。参道を子どものための施設へのアプローチとすることで、神社と参道が日常生活に根差したより身近な存在となる。



王子白髭神社・・・小学校に隣接した神社。擁壁で参道が囲われ、参拝者や近隣住民などの特定の人にしか利用されていない印象を受けた。また、3年に一度行われる例大祭では、長くて狭い参道を利用し、大通りへと多くの担ぎ手たちを連れたる宮出しが行われる。



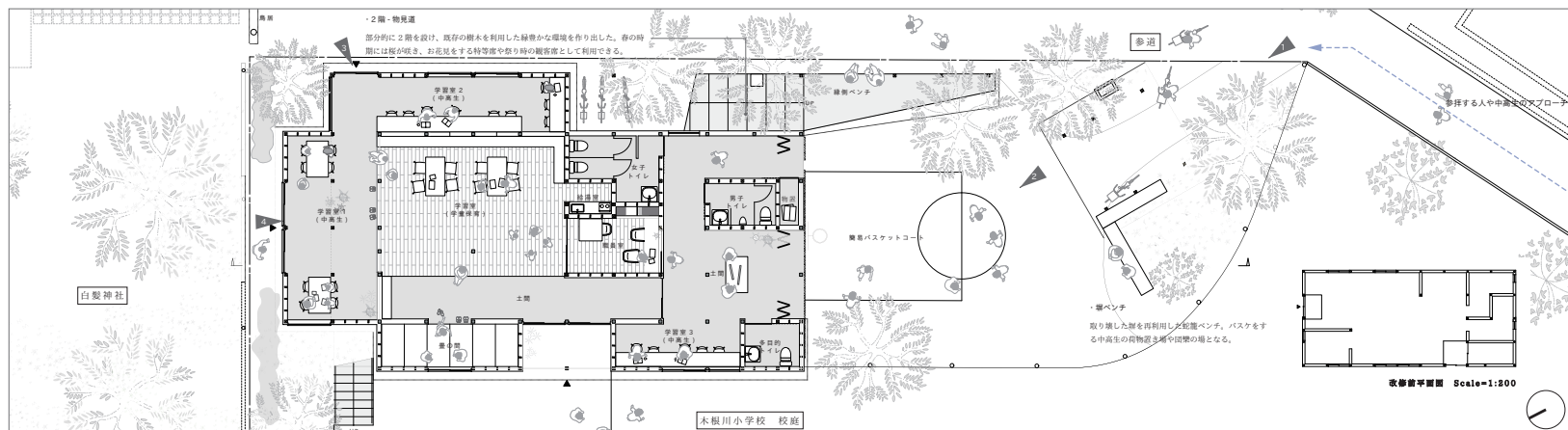
1. 参道から産物を購める

参道に対して閉じられていた敷地内のコンクリート柵を取り壊し、第二の参道として設け道と屋根をかけた。神社の周囲に広がる環境と呼応することで、その場所ならではの豊かさを感じる建築となる。

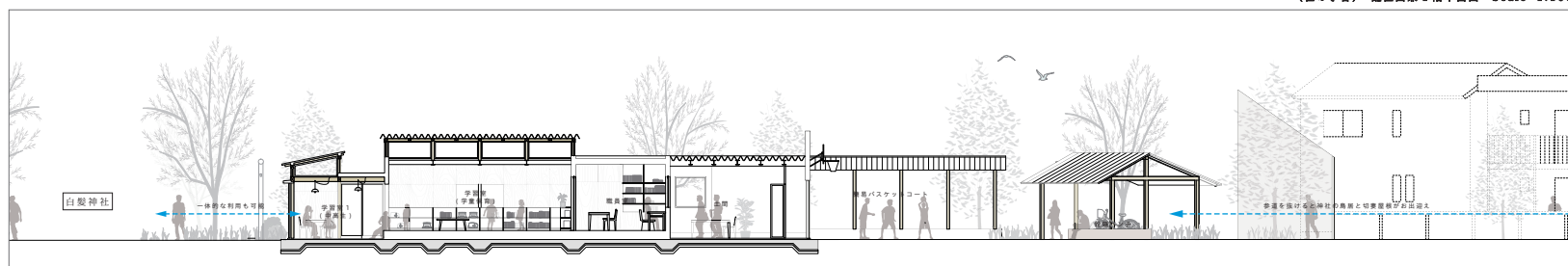
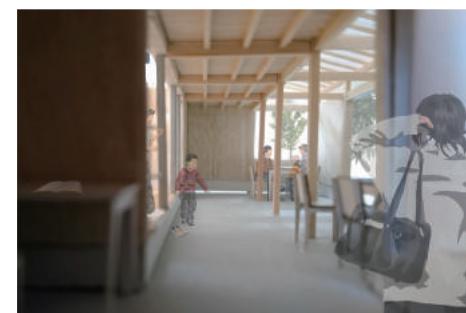


2. バスケットコートで遊ぶ中高生と購める近隣住民

地域の新たな遊びとなるバスケットコートを学童保育に計画した。神社参拝者や近隣住民が利用できる緑樹ベンチを設け、緑樹ベンチを挟みながら程よい距離感で中高生と交流することができる。



〈社の学会〉 配置図兼1階平面図 Scale=1:100



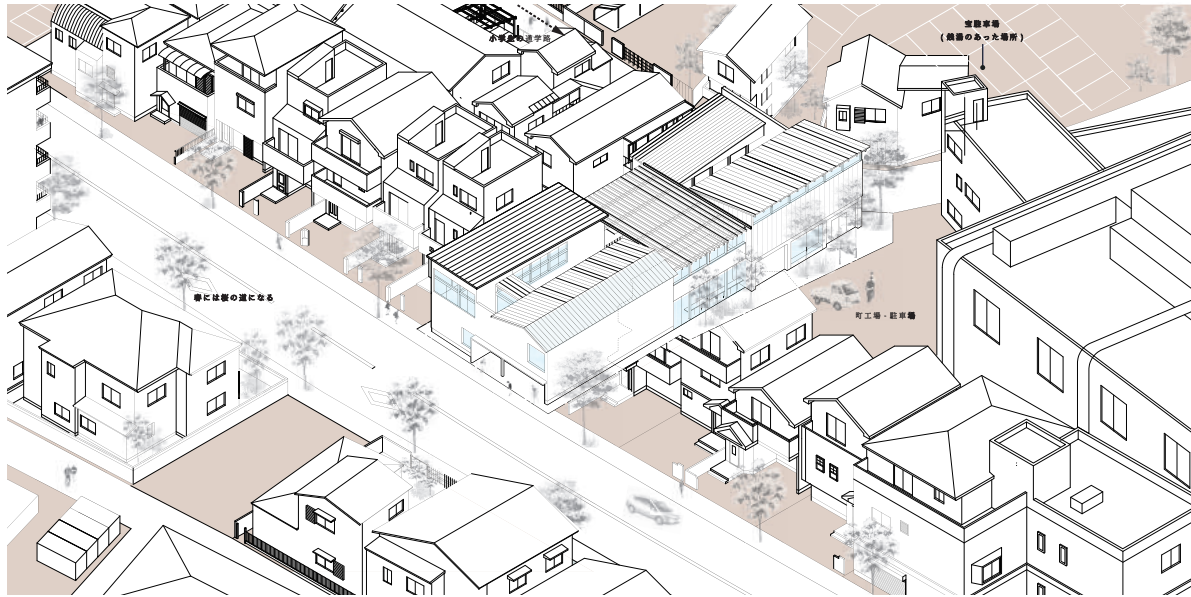
〈社の学会〉 断面図 Scale=1:100



3-4. 勉強スペースと学習保育・学習室

既存の学童保育施設の床レベルは残し、中高生の勉強スペースとレベル差を設けることで、程よい距離感を保ったまま関わりを持つことができる。子どもたちが年齢の枠を越えて共に学び合い、成長していける場を生み出す。

かつてこの場所にあった銭湯を、学童保育と組み合わせて新築として蘇らせる。商店街を通してアプローチしていた銭湯は、南産後取り壊され、跡地は現在駐車場となっている。そこで、商店街中央に通る路地をこの地域特有の資源と捉え、路地を内包した学童保育施設を新設する。さらに、地域に住む多世代の居場所となるように、お茶を飲む、本を読む、リハビリ・医療相談ができる空間を設ける。一般的な商業利用だけでなく、学童保育施設を含む地域住民の憩いの場として計画することで、地域の拠点として賑わうようにする。

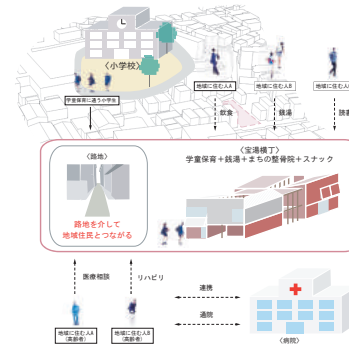


〈東四つ木〉特有の地域資源



本郷川商店街・跡地・・・銭湯「宝湯」の門前に建てられた商店街。路地の両側には自給菜店舗の長屋が連なり、ほとんどが空き家となっている。銭湯が建て壊されると共に商店街の活気も徐々に失われ、現在では廃墟のような佇まいとなっている。銭湯の跡地には駐車場が整備され、銭湯の入り口で跡が今でも部分的に残っている。

宝湯横丁 - 地域と関わる仕組み



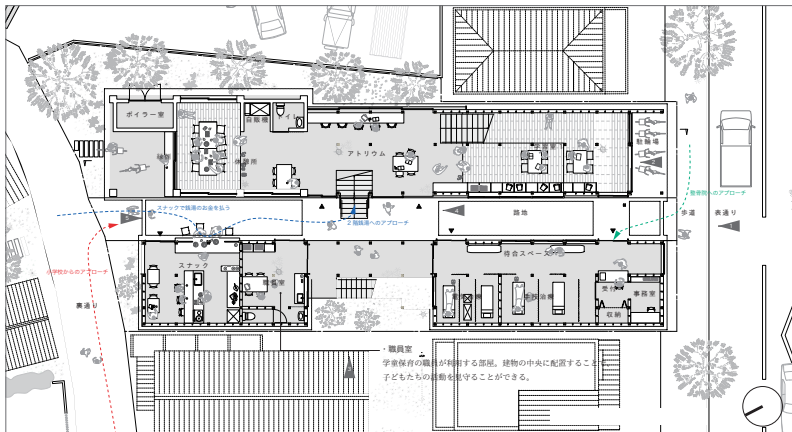
1. 正面入り口

路地を介して建物にアプローチする計画とし、人通りの少なかった路地に賑わいが生まれる。地域の居場所であった商店街を子どもを中心とした地域の居場所を蘇らせる。

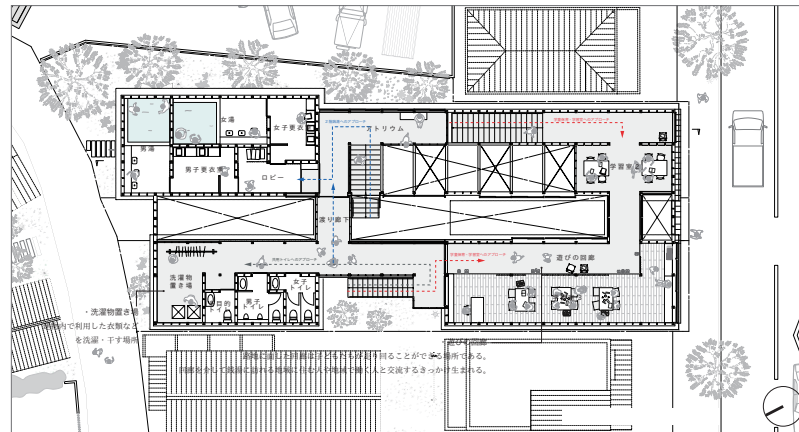


2. 一階学習室 (学童保育)

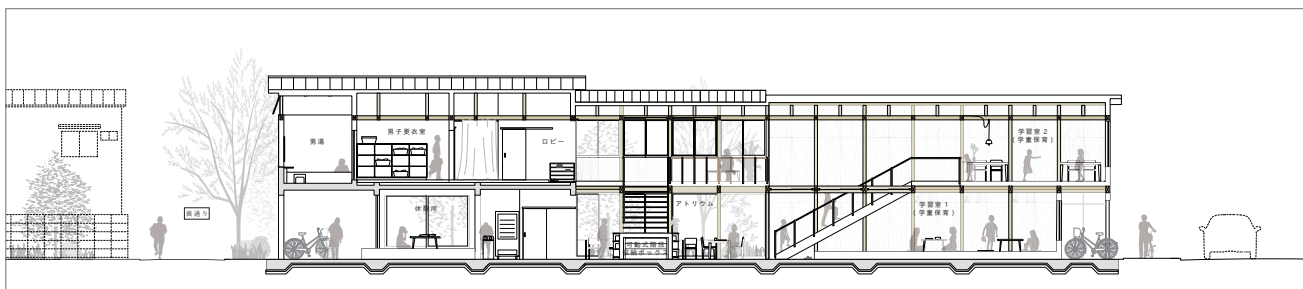
路地と平行線状に、学習室を配置し、学習室、アトリウム、銭湯・休憩所と続く計画とした。大通りから直通りまで視線が抜け、それぞれの居場所が重なって見える。



〈宝湯横丁〉 配置図第1階平面図 Scale=1:150



〈宝湯横丁〉 2階平面図 Scale=1:150



〈宝湯横丁〉 断面図 Scale=1:100



3. それぞれの空間のハブとなるアトリウム

路地と交差するように配置されたアトリウムは、敷地内に訪れる人々との交流のきめ細やかなる場所である。半透明の扉によって自然光を柔らかく取り込み、扉の下の通路で人々を明るく照らす。



3. 空間的な豊かさを生み出す路地

川越の真なるボリュームごとによって、特徴のある空間的な豊かさを生み出した。大型構からなるのびのびとした空間や壁やカーテンなどの暖かいによる落ちついた空間を施し、路地に設けた大きな開口部を通して緩やかに地域とつながる場とした。



3. 空間的な豊かさを生み出す路地

川越の真なるボリュームごとによって、特徴のある空間的な豊かさを生み出した。大型構からなるのびのびとした空間や壁やカーテンなどの暖かいによる落ちついた空間を施し、路地に設けた大きな開口部を通して緩やかに地域とつながる場とした。